

心理臨床の営みを探索する上での力動システム理論の有効性と限界 ～トロニックの二者一対の意識拡張モデルの吟味を通して～

石 谷 真 一

The Effectiveness and Limitation of the Viewpoint of the Dynamic Systems Theory in Exploring Clinical Work in Psychotherapy —Through Discussing about Tronick's Dyadic Expansion of Consciousness Model—

ISHITANI Shinichi

Abstract

Developmentalists' approach, in which they try to apply the principles in relational development of infants to exploring clinical work in psychotherapy, is thought to be useful for explaining clinical work from the scientific view. In this article, the effectiveness of the dynamic systems theory (DST), on which developmentalists' theories depend, was examined that can be available or not in exploring clinical work in psychotherapy. As a results, in addition to mutual regulation in affective interaction between therapist and client, it was thought that reflexive interaction with each one's self occur and that both interactions are related indispensably. If the dyadic expansion of consciousness model can be applied to therapeutic change process in clinical practices with children, adolescents, and adults, not only behavioral interaction which is measured objectively but also subjective interaction that is reflexive interaction with one's self are needed. So, DST is thought to have availability and limitation in exploring clinical work in psychotherapy.

キーワード：心理臨床の営み、力動システム理論、二者一対の意識拡張モデル、相互調節、自己との再帰的交流

Key words: clinical work in psychotherapy, dynamic systems theory, dyadic expansion of consciousness model, mutual regulation, reflexive interaction with one's self

I 問題：心理臨床の営みを解明する観点としての乳幼児関係発達

(1) 心理臨床の営みを解明する二つのアプローチ

筆者は臨床心理学を学び、心理臨床実践に関わる中で、人の心が他者との出会いと関わりによって変化していく様に魅せられ、そのプロセス、またそのメカニズムは如何なるものかに強い関心を抱いてきた。すでに幾多の理論や見解が、臨床過程と心の変化のメカニズムを説明するために提唱されてきたし、そうした理論や知見の蓄積から新たな技法が開発され、それがまた臨床実践を広げ深めていくという交互作用的な展開が、臨床心理学の100年に及ぶ歴史でもあった。しかし今なお、心理臨床の場すなわち援助的關係の中で行われる何が最も重要なのか、あるいは関係の中で生じるどのような事柄が、心の変容に最も寄与しているのかについて、多くの議論があつて統一の見解を見てはいない。それは「人間とは何か?」「生きるとはどういうことか?」という問いに対して、多様な観点から様々なことが言えて、どれもある真実を捉えているが、唯一絶対の答えを出すことができないのと似ている。

その中で、上述の問いに答えるべく、大きく二つの立場が臨床心理学内にある。客観的で実証可能なデータに基づいて心の働きを論理的に解明し、明確な方向性をもって心の働き方を変えようと企てるエビデンス・ベースド・アプローチがその一つ。もう一つは対照的に、当事者の主観に着目し、主観の世界がどのように組み立て直されていくかを、当事者の語りに沿って共感的に感じ取ろうとするナラティブ・アプローチである。両者は、心理臨床という営みで生じる変化を捉える二つの大局的な観点であり、同時に実践への対照的なアプローチを導き出してくる。よって両者はしばしば対立的な関係にあり、心理臨床の「科学性」や「専門性」をどこに見出すかにおいて異なる見解をもっている。

その中で、上述の二つのアプローチを橋渡そうとするユニークな立場もある。それは心理臨床の営みを、乳幼児が養育者との関係を通して取り組んでいく心の発達過程と、同質ないし類似の側面を含んでいると捉える、臨床実践と発達研究の両者に取り組む臨床家・研究者である。彼らは臨床家、特に精神分析的な志向性をもつ実践家の間で、発達論者(developmentalist)と呼ばれている。発達論者は乳幼児と親との間の情緒的な交流を客観的・実証的に分析し、その結果から乳幼児の心が養育者の心と如何に連動しながら形成・発達していくかを描き出す。そしてその心と関係性にまたがる発達過程を規定しているメカニズムを特定していく。するとそのメカニズムは大人同士の心理臨床の場面にも生じているばかりでなく、心理臨床における心の変容を大きく規定するファクターになっていることが見えてくるというものである。

(2) 乳幼児発達研究の成果を心理臨床の営みの解明の起点にするアプローチ

心理臨床の営みを親子の関係での育ち・育ての過程と重ね合わせて捉える視点は、臨床心理学の出発点からありさほど珍しいものではない。しかしどういった側面でどのように共通するのかを具体的に、かつ実証的な吟味にも耐えうる形で明らかにしつつある点で発達論者のアプ

ローチには価値がある。筆者は心理臨床の営みが乳幼児発達研究の知見から捉え尽くせるとは思わないが、エビデンスに基づく理論化は次の点で重要なものとする。心理臨床活動が臨床心理士という専門的な資格をもつ者によって行われることが社会で広く認知されるようになった今日、心理臨床の営みについて一般の方にも理解される言葉で説明する責任がある。その際、ある程度客観的また実証的に説明する方法を持っていなければ、今の社会では広く受け入れられることは難しいのではないか。発達論者のアプローチは、心理臨床の過程で生じる情緒的・体験的側面の重要性を損なわず、しかも客観性や実証性を備えて「科学的」に心理臨床の営みを語れる、貴重な観点になりえるのではと筆者は考えている。

先述したように、実証的な乳幼児発達研究の知見を、心理臨床場面で生じる援助者と被援助者との関係—心理にまたがる変化を説明する原理としようとする立場を、発達論者の一人であるスターン（Stern, D. 1985）は「被観察乳児」の発達・臨床観と呼んでいる。一方、臨床心理学には以前からもう一つの発達・臨床観がある。スターンが「臨床乳児」の発達・臨床観と呼ぶものである。これは、大人の被援助者との臨床場面で、被援助者が自ら語る生育史や、援助者との関係の中に実際に再現される関係性の体験をもとに、臨床場面で再構成された成育歴である。言い換えれば、被援助者と援助者とが協働で作成した被援助者の履歴についてのナラティブである。スターンをはじめとする発達論者の多くは、この「臨床乳児」の発達・臨床観に数々の修正を迫るが、実際の心理臨床において有用で貴重な観点として今も多く臨床家に活用されている。

筆者もまた心理臨床の営みを「被観察乳児」の発達・臨床観でのみ説明できとは思えないし、現在のエビデンス・ベースドなアプローチに完全に依拠できるとは考えない。しかしそれでは、エビデンス・ベースドなアプローチのどこに限界があるのか、心理臨床の営みのどのような側面を捉えることが困難なのか、その側面を捉えられるエビデンス・ベースドなアプローチは本当にあり得ないのか、について十分に検討する必要があると感じている。そこで本稿は、上述したようにエビデンスに依拠する立場の中ではかなり「臨床」寄りの発達論者のアプローチを取り上げ、そのアプローチで捉えられる心理臨床の理解にはどのような限界があるのかを考えてみたい。それによって心理臨床の営みを解明するにはどのような観点からのアプローチが求められるのかについて、いくらかの方向性を示せるのではないかと思う。このようなテーマは到底本稿のような小論で扱い切れるものではないが、今回は、発達論者の発達・臨床観の基底にあるパラダイムに立ち戻り、その根本的な発想が心理臨床の現実を捉える上でどこまで適切なのかを吟味するという手法をとる。その際、発達論者のアプローチと対照させるために、「臨床乳児」の発達・臨床論の中では発達論者寄りと目されるオグデン（Ogden, T.）の理論と見解を取り上げ、比較してみようと思う。そうすることで「被観察乳児」と「臨床乳児」との隔たり具合、あるいは橋渡しの可能性についてもいくらか言及できれば、本小論の意義はあるだろうと考えている。

Ⅱ 乳幼児発達研究の成果から心理臨床の営みを解明しようとする発達論者のパラダイム

(1) ダイナミック・システム・セオリーに基礎を置く交互作用発達という観点

「被観察乳児」の発達観は、乳幼児を周囲の環境から孤立して生存し発達する単体として見ているわけではない。ウィニコット (Winnicott, D.) が「一人の赤ん坊などいない、いるのは一組の親子だ」と言ったように、乳児を生まれながらに関係に埋め込まれた存在と見なし、養育者との関係の性質（関係性）と乳幼児が発達させる心の働きや仕組みは不可分に連動していると捉える。このような発達観を、交互作用発達 (transactional development) と呼ぶ。交互作用発達の原理では、生まれ落ちたばかりの乳児ですら、原初的なものであれ、心あるいは心に発達する原基を有していて、養育者との間で一方的でない相互的な交流が生じていると見なす。発達論者は実際に、発達最早期の親子の相互交流を示す数々の証拠を提示している (Stern, D. 1985あるいは拙著2007)。

こうした乳児の捉え方は、心を環境の影響から比較的独立に、生体自体に備わる生成プログラムに従って形成されていくと見る従来の成熟モデルの発達観とは対照的である。と同時に学習による環境への適応過程として心を捉える発達観とも異なっている。また「臨床乳児」の発達論が主張する母子一体の融合状態としての心の始まりとも見解を異にする。それを端的に表せば次のようになる。まず乳児も親もそれ自体が一つのシステムであるが、両システムは開放系のシステムなので、両者が会合するところには必ずや相互作用が生じ、二人の関係性というさらに上位の（あるいはマクロな）システムが成立する。関係性というシステムは、関係の構成員である乳児と親という下位（あるいはミクロ）システムから構成されるが、同時に関係性の如何によって乳児と親の心も変化していく。つまり上位（マクロ）のシステムと下位（ミクロ）のシステムの間には循環的な関係があつて、相互に規定し合うと考えられる。このような考え方はダイナミック・システム・セオリー (dynamic systems theory: 以下、DST と略す) と呼ばれている。

交互作用発達とは、乳幼児と親それぞれの心の自己組織化(上述のミクロ・システムに相当)と両者の関係性との相互規定的関係という観点からこそ、心の発達過程が適切に捉えられるという発想なのである。しかも乳幼児は心身の様々な機能が次々と発展していくので、乳幼児の心の自己組織化は絶えず更新されねばならない。その更新は常に親子関係の、そして親自身の心の自己組織化の更新と並行し連動して進まねばならないことになる。したがってある時点での乳幼児と親の心の自己組織化は、それに先立つ両者の関係性の帰結であると同時に、次なる関係性を規定していく重要な要因となる。交互作用発達観とは、DSTに見られる階層を異にするシステム間の相互規定的な循環を、時間軸上に引き伸ばしていくようなイメージになる。

(2) 表象を基礎に置く「臨床乳児」の発達モデルと DST の非表象モデルとの比較

交互作用発達という観点を大人の臨床場面に応用するなら、被援助者と援助者との情緒的に交わる場面では、二人の関係性というより高次のシステムが成立し、それによって各々の心の

自己組織化は影響を受け変容するとなる。こうした臨床過程の理解は、関係性を本質視する今日の心理力動的立場の臨床理論の趨勢、いわゆる「二者心理学」とも合致する。ただ、これだけのことを言うのなら、何も交互作用発達を持ち出すまでもない。重要なのは、関係性という上位のシステムと、関係の構成員の自己組織化という下位のシステムとの相互規定的関係がどのようなメカニズムによって生じるかなのである。この問いに対し、従来の臨床理論がほぼ間違いなく持ち出してくるのが、表象（representation）という概念なのに対し、DSTに基づく交互作用発達観では表象理論に安易に依拠することを拒む。そこで表象についての理解の違いに着目して、両者の相違を明確化してみよう。

表象とは、心の機能によって心の中に創り出されたいわば仮想現実である。表象をどう定義するかは心理学においてもいくつかの立場があるが、臨床心理学において重視されるのは、主として感情的価値が色濃く反映された自己と他者との関係性に関する表象である。精神分析学では対象関係などと呼んでいる。従来の「臨床乳児」の発達論では、発達早期に養育者との関係体験をもとに心に表象が作り出されたら、それを雛型にして、実際の対人関係を情緒的に評価し、対人関係を営むようになると考えられている。被援助者が日常生活で困難を来すのも、この表象の歪みゆえと考える。表象の歪みは臨床場面の関係性にも表れ、過去の重要な他者との関係性と類似の関係が再現されやすい。それを逆手にとって表象の歪みをあぶりだして被援助者自身に洞察してもらおうとするのが、古典的な精神分析の治療機序であった。被援助者の表象という、いわば種か遺伝子のように心に潜在していた関係性が、援助者との関係という土壌を得ることで発芽するという上記の発想は、やがて、被援助者の表象に呼応して援助者の側にもそれに対応する表象が呼び覚まされやすく、臨床場面の関係性は被援助者のみによって規定されているのではなく、呼応した対応を実際にしてしまう援助者の逆転移反応によって具体化するという共同構築説に発展して、今日の心理力動的な臨床過程の一般的な理解となっている。

一方 DST に基づく発達論者は、従来から表象と呼ばれてきた心理的な内容が成立するのは3歳以降であり、それまでは前表象と呼ぶような手順知識（procedural knowing）が、その代わりをするとしている。これは暗黙の関係知（implicit relational knowledge）とでも呼べるもので、他人と関わる際にこのように振る舞えばこのような反応が返ってくるだろうという相互交流についての基底的な想定である。表象とは言語なりイメージなりの象徴を用いた体験の捉え直し、いわばその体験の個人特有の再構成であって、その個人が意味づけたナラティブである。したがって再帰的な心の働きを獲得し使用できる3歳ころまでは真の表象は困難であると考ええる。暗黙の関係知とは表象とは全く異なる非再帰的過程でいわば自然発生的に生じるものだと考えるのである。

DST とはもともと物理的現象を説明する理論である。たとえば水を沸騰させれば、必ずや水分子の対流というある特定の形状をもつ運動が生じる。しかし水が沸騰するときの形を前もって規定しているような表象等価物は一切存在しない。対流を引き起こすのは水に与えられた熱エネルギーである。しかし熱エネルギーが対流の形を決めているのではない。特定の形の対流は、その雛型はどこにもないけれど、その都度同じ形に創造されるものである。したがって人

と人との関係の場合も、片方あるいは両者が表象のような雛型をもっているからそうした関係性になったというよりも、二人の間に関係が生じた以上二人の共創造の結果そうなのである。人間関係の場合、水の対流を引き起こした熱に相当するものは何だろうか。発達論者の多くがここで間主観性への動機づけ、すなわち他者とつながり、交わり、結びつき、その主観の世界を共有したいという動機づけを挙げている。

(3) 人と人とを結び付ける基本的な動機づけとしての間主観性

間主観性 (intersubjectivity) は乳幼児の心の形成・発達を解明しようとする研究者にとって、また発達研究の知見を臨床理解に還元しようとする発達論者にとってもキーワードと言える概念である。実のところ間主観性をどう捉えるかという点で様々な議論があり、それは臨床心理学のみならず心理学全体にとっても極めて本質的なテーマと言える。しかし本稿では間主観性概念についての議論はすべて割愛して、前項末に示した包括的な意味での間主観的動機づけによって乳幼児と養育者との関係に何が生じ、それがどのように乳幼児の心の形成に与るのかについて述べる。また大人の心理臨床の解明にこの観点がどのように役立つかについても触れる。この側面に限っても、発達論者の間でさえ見解の相違がある。本稿では上述した DST に忠実に拠って、かつ実験による実証的な資料に基づきながら理論化を試みているトロニック (Tronick, E. 2007) の見解を中心に見ていくことにする。

トロニックは先述したスターンらとともに、乳幼児発達研究の成果を大人の心理臨床の営みの解明に積極的に適用しようとする発達論者のグループ、ボストン・チェンジ・プロセス研究グループ (BCPSG) のメンバーであった精神分析家である。彼はスターンの共同研究者の一人として、スターンの考えに近い部分を多く持ちながらも、間主観性の捉え方、その乳幼児の心の発達に及ぼす影響の説明原理、そして臨床過程への適用については見解を異にしている。トロニックの理論化の根底にあるのは先述した DST である。乳幼児と親の心という二つのミクロ・システムが出会うとき、そこには相互調節 (mutual regulation) のプロセスが生じ、関係が生まれる。相互調節がうまくいくなら、二人の心というサブ・システムの上に、二者一対の意識状態 (dyadic state of consciousness: 以下 DSC と略す) が実現すると見る。トロニックは間主観性という言葉を用いてはいないが、DSCこそがトロニック流に捉えられた間主観性 (間主観的意識) だと考えてよいと思う。

(4) 意識状態と二者一対の意識拡張モデル

DSC に先立って、意識状態 (state of consciousness: 以下 SOC と略す) について説明する必要がある。意識状態とは、様々な階層をもつ人の心理生物的 (psychobiological) な自己組織化の最も上位にある包括的なシステムである。意識状態とはいわばその人なりの世界と自分の意味づけ方、世界との関係の結び方の総体である。少なくとも 3 歳以前の乳幼児にとって意識状態とは自覚的な意識を意味しているわけではない。ただ自覚しようがしまいが、生きている限り、人は周囲の世界から意味を見出し世界と交わる行為を組織していかなければならず、そのためにある程度の複雑さと一貫性をもった心身の組織化が不可欠である。この世界との相互作用を

基底に置く考え方は、ギブソンの生態学的心理学の発想に馴染んでおればそう理解に難儀しないであろう。生態学的心理学では心を環境との関係に埋め込まれたものと見る。心の働きとは環境から自らの生命の維持発展に役立つもの（アフォーダンス）を捉える働きに他ならない。したがって心とは常に環境と一組になってその働きが決まると考える。トロニックは意味（meaning）を強調するが、意味とはギブソンの用語を用いるならアフォーダンスに相当するだろう。ただし、乳幼児にとって世界とは主として親・養育者（の心）である。したがって意味とは、親あるいは親と共にあるあり方が、自分に及ぼす情緒的な状態などを指すことになる。環境が心をもった他者であるというところが極めて重要である。これについて本稿の最後に言及するつもりである。

トロニックは人は各々その年齢に応じた（age-possible）意識状態を備えているが、それには限界があると見なしている。親子の間で主として情意的な面での相互調節がうまくいき先述した DSC が実現したとき、DST にあるように上位のシステムと下位のシステムとの循環的な相互作用が生じ、個々の SOC はその複雑性と一貫性の上で拡張される。これをトロニックは二者一対の意識拡張モデル（dyadic expansion of consciousness model：以下 DEC モデルと略す）と名づけている。たとえば子どもは一人でもおもちゃなどを用いて遊ぶが、特定の大人がそばにいて遊びの相手をしてやる時には、一人でいる時よりもずっと遊びが発展して情緒的に深い満足を得ることがある。子どもはこういう大人とまた一緒に遊びたいと強く願う。こうして二人で遊ぶ体験を繰り返しながら、やがて子どもは一人でも、また別の他者とでも、先の二人遊びに近い情緒体験を持つことが可能になるかもしれない。この例で考えてみるなら、特定の大人との間に実現した深い情緒的満足に至る体験が二者一対の意識の拡張であり、これによって子どもの SOC は変化したのである。このモデルによって大人の臨床場面で生じる変化もある程度説明できるだろう。被援助者は援助者との関係（すなわち臨床場面）において、一人でいる時あるいは他者といえる時とは異なる意識体験を持つかもしれない。たとえば自分が受け入れられ理解されているといったような体験もその一つであろう。それは援助者との相互調節のプロセスを経て DSC が実現し、それが被援助者の SOC を一時的ながら変えたからと説明できるだろう。しばらくは援助者とともにいる時でしかそうした SOC は長らえないものかもしれない。しかし同じ SOC を繰り返し体験することで、次第にその SOC は被援助者にとって身近なもの、絶えず呼び出せるようなものになっていく。このようにトロニックは、人は他者との交わりを通して個人の心の限界を拡張していく、それは発達にも臨床にも共通する現象であると見るのである。

(5) 二者一対意識状態が後の発達に及ぼす影響

トロニックはその一方で、二人の間の相互調節が必ずしもうまくいくわけではないことも強調している。親と乳幼児の間でさえ、多くの誤解やミスマッチ、タイミングの齟齬などが日常的に生じている。間主観的状态を築くには現実には極めて「散らかっている（messy）」のである。そこで両者が互いの情緒や意図を確かめ合う相互調節のプロセスが重要になる。DSC とは両者の能動的な適応過程を通して初めて実現するものである。乳児ですらこの相互適応を可

能にする開放系のシステムを備えている。しかし乳児と親の心は非対称的で、乳児に比べ親のシステムの方が変わりにくい。そのため両システムにミスマッチが生じれば親の心に沿うような方向に DSC が作り出されることも多い。たとえば抑うつ的な母親と絶えずともに過ごす乳児は、抑うつ的でない母親の乳児に比べて、ずっと大人しく「抑うつ的」なことが多い。乳児はそうすることで母親との間に DSC を生み出したのである。そしてこの DSC に即して SOC も作りだされていく。結果的に乳児が親の心に適応したような SOC が生み出される。これをトロニックは有名な静止顔の実験（still face paradigm）による、一時的な関係阻害状況に対する乳児の反応によって証明している。この関係阻害が慢性化するなら、上述したような特定の DSC が SOC を規定していき、年齢に応じた発達を遂げることに支障が出るのが考えられるのである。このように DST では母親の表象世界が伝達されたと説明せずとも、母親の心理的問題が乳児の発達に影を落とし、乳児が母親と類似した行動パターンを身につけてしまうことを説明できる。昨今の神経生物学の見解からも、表象のような典型が脳神経系に局在するとは考えにくく、ある環境条件に即応してその都度ある反応パターンが再活性化すると説明モデルの方が受け入れやすいという。

最後に、臨床場面における関係性の最大の特徴である過去の関係性の再現性、すなわち転移－逆転移現象はどのように説明されるのだろうか。親子の間のように長期にわたって情緒的に密接な相互交流を繰り返せば二人の間に特有の DSC が生じ、その関係にいる時特有の SOC が作り出される。私は母親と居ると決まってこんな気分になるといったようなものである。母親との関係を他の誰とも違う関係にしているのはまさにこの気分である。そしてこの気分には何らかの自己評価感情を含んでいる。たとえば私はきっと人を楽しい気分にはできないといった自己評価である。この特定の自己感情といったものは母親との関係を越えて、他の関係においても経験しやすいし、新奇な関係場面でもその自己感情に沿って特定の SOC をその都度再活性化しがちである。それが臨床場面で援助者の側の対応した SOC を呼び出し、両者の共働プロセスでもって特定の関係性が共創造されると説明できるであろう。

(6) 発達に伴って生じる SOC の変化～再帰的・象徴的な心の側面～

トロニックは、SOC は加齢に伴い精神・身体機能が成長・成熟するにしたがい、当然質的に変化すると見る。乳幼児に限って言えば SOC とはもっぱら親との関係を介して組織される情意的な状態（他者とともにあるあり方）と見なせるが、幼児期から児童期、そして青年期へと進むにしたがい、イメージや言語といった象徴形式で表現される再帰的・反省的な自己意識、あるいは心理力動的な立場の心理臨床で重視されてきた力動的無意識が、SOC の重要な要素となるとしている。上記の点を敷衍するならば、SOC を決定するものとして自分自身との関係性の重要度が増してくると言えるだろう。それに伴い DSC もまた、自分自身をどのように体験し受け止めているかという、自分自身についての再帰的な理解の共有が欠かせない。すなわち主観的に体験された自己についての理解の共有が DSC が成り立つための不可欠の要素になると考えられる。トロニックも、関係を介して人の心が発達・変化することを「科学的」に解明しようとする研究者が、あらためて力動的無意識や象徴を介した自己表現とその意味理解

に目を向ける必要があると述べている。ただだからと言って DSC の実現による SOC の拡張という側面が色あせるのではない。それは大人の臨床過程においても基底に流れているものだし、DSC は力動的無意識や象徴的に表現された心的内容の適切な理解と共有を含みこんだものへと拡張していくはずである。

この点を考慮すると、心理臨床の営みの次の側面が改めて浮き彫りになってくると思われる。すなわち、被援助者が自分自身と向き合い、自分自身を新たに捉え直し、自分自身との新たな関わりを築くという自分との取り組みの側面である。トロニックの指摘にもあったように、心理臨床の営みを「科学的に」解明しようとする者が見落としがちなのはまさにこの点、である。ただし他者との情緒的体験と自分自身との取り組みとは別個のものではなく、むしろ不可分に結びついている。ストロロウをはじめとする間主観的アプローチの精神分析家 (Buirski, P. & Haglund, P. 2001) が言うように、自分自身との取り組みは援助的關係性の文脈によって全く異なったものになりうるだろう。また自分自身と取り組むためにこそ、ある種の関係性が必要不可欠なのだとも言えるだろう。次章では、これまでとは対照的に、自分自身と取り組むことを心理臨床の営みの中核に置く立場から、臨床的關係性の意義について再度検討する。

Ⅲ 自己と対峙するために不可欠な関係性

(1) 「一者心理学」から提唱された心理－関係性の新たな理解と心理臨床の捉え直し

上述した自分自身と取り組み自分との関係を結び直すという観点は、臨床心理学においてむしろ当初からあったものとも言える。しかし精神分析学においては、性欲動に対する防衛と力動的無意識の意識化という点に限定されてきたし、それゆえ「一者心理学」と評され過去の遺物のように昨今では批判されがちである。確かに、心理臨床の営みを専ら被援助者の閉鎖系の心の中で生じる再構造化や機能調整と捉え、援助者は外から中立的に解釈を与え見守るのが役割だと考える者もいるだろう。しかし「一者心理学」から出発した現代の精神分析家も「二者心理学」の実践家・理論家と対峙して、臨床的關係性の捉え直しと心理臨床の営みの再定式化を行っている。そのような捉え直しの起点となり、また原動力ともなっている重要な観点が投影同一化 (projective identification) である。そしてこの投影同一化を軸にして、独自の間主観性臨床論を「一者心理学」の伝統から導き出しているのがオグデン (Ogden, T. 1994, 96) である。以降にオグデンの心理臨床の理解を概説し、後に先述したトロニックの DSC や DEC モデルとの比較検討を行いたい。

(2) 投影同一化という概念とその変遷

投影同一化はもともとクライン (Klein, M.) によって原始的な防衛機制として見出された心のメカニズムで、当初は専ら被援助者の無意識的空想として捉えられていた。その意味するところは次のようである。被援助者は自らの心の中に自らは認め難い観念や感情がある時、それを自分の心から切り離して締め出そうとする。そのために、そういった観念や感情は自分のも

のではなく、他者のもの、すなわち援助者が感じ考えていることだと決めつける。さらに援助者をそのような観念や感情を抱いている者として恐れたり、敵意を向けたりする。援助者にしてみれば一方的に特定の観念や感情を抱いているものとして扱われるわけで、ある種の濡れ衣感情が惹起される。それをぬぐい去ろうとあがけばあがくほど、被援助者からは援助者が自分の恐れた通りになっていくと感じ取られ、被援助者の確信はますます深まり、援助者はいつの間にか被援助者の恐れる通りの振る舞いをする羽目に陥る。このように投影同一化は心理的距離の近い関係に生じやすく、また二人の関係を錯綜としたものにしていく。臨床場面が投影同一化に浸食されてしまうなら、心理的援助に向けた共同作業といった当初の目的は見失われてしまいがちになる。投影同一化は他の防衛機制と違い、他者を巻き込み他者にその片棒を担がせることで初めて成立するものであり、当初から「一者心理学」の枠組みを越えた現象だったのである。

投影同一化という概念はその後、幾人もの精神分析家によって心理臨床の営みを解明する重要な観点として活用され、同時に投影同一化の概念そのものも洗練されていった。中でも大きな展開点は、ビオン (Bion, R.)、ローゼンフェルド (Rosenfeld, H.) らによって、投影同一化は被援助者の心の中でのみ作用するのではなく、その相手である援助者との関係に無意識的空想が具現化されること、すなわち対人交流と無意識の心理力動とが表裏一組に分かちがたく結びついたものであることが示されたことにある。また投影同一化は病態水準の低い精神病圏や人格障害圏の被援助者の心と、被援助者のもつ人間関係で大々的に作動している病理的なものばかりでなく、健常者の他者の心への共感的理解といった日常の関係における情緒交流にもごく自然に見出されるものであること。またビオン (1984) のコンテイナー・コンテインド・モデルのように、生まれたばかりの、まだ心をもつとは言えないように見える乳児がどのようにして心をもち始め、心理的体験を生み出せるようになるのかという「臨床乳児」の発達論において心の起源を説明する際の不可欠の前提ともなっている。ビオンによれば、生まれたばかりの乳児は大人なら心理的なものとして体験するような不快な感情や不安などをまだ心理的なものとしては体験できない。それはモノとして自分の内から排除され外 (= 親) に投げ出される。その結果、親は乳児によって特有の情緒的体験を引き起こされるが、それを心理的なものとして乳児の状況に結び付けて理解でき、乳児の不快な感情や不安に対処できたなら、乳児は次第に自分の排除し投影したモノが心理的に耐えられる自分の感情や不安であることに気づき、やがては自分自身で抱えて処理することも可能になるというのである。ビオンは実際に乳児と親との観察を行ったわけではなく、喩として用いたのであり、ビオン自身は実際には重篤な大人の患者との間で上記の体験を重ねていったのである。

(3) オグデンによる投影同一化概念の捉え直し

上記の投影同一化概念の変遷を踏まえて、オグデンは投影同一化を、発達にも臨床にも通じる極めて人間的な営みとして捉え直そうと試みている。オグデンは投影同一化を、彼独自の分析の第三主体と間主体性 (intersubjectivity の邦訳だが、その意味内容から間主観性ではなく間主体性と訳されている) という観点から捉え直している。分析の第三主体とは、精神分析療法

をはじめ情緒的に深い交流が生じる心理臨床の関係において、セラピストと患者の間に立ち現れるもう一つの主体のことである。臨床経験を思い起こせば容易に想像できることだが、被援助者は援助者を、実際の援助者とは異なり被援助者の心にある表象（内的対象）を投影して感じ取っているし、関わっていく。同時に援助者もまた、援助者の心にある特定の対象と重ね合わせて被援助者を理解し関わる。そこで両者とも、実際の相手とは別の、自分自身と相手との奇妙なアマルガムと向き合うことになる。つまり被援助者も援助者も直接に相手と交流しているようでいて、実は、分析の第三主体と関わっているとも言える。投影同一化(特に病理的な)はこの第三主体が肥大して両者の主体性をかなりの部分のみこんでしまい、被援助者も援助者も臨床場面では普段の自分としては振る舞えなくなってしまう。このとき両者の間には、援助者はこのように思っているから私（被援助者）はこう振舞わざるを得ないとか、被援助者は私（援助者）をこのように動かそうとしているからこう応じざるをえないといった、間主体的想定に自分自身が絡め取られることが相互に生じている。このように投影同一化が強く作動しているときには、非対称的だが相互的な間主体性が具体化・現実化し、両者が普段の自分とは異なる自分にならされているのだ。しかしオグデンはこうした自己の変容を決して否定的にばかりは見ない。というのも、投影同一化のようなプロセスを経て、自己が変容するのでもない限り、心はそれ自体が持つ自己閉塞性を打破できず、変容も発達も考えられないからだと述べている。しかしそのためには、第三主体に取り込まれてしまった自分の主体を取り戻すプロセスが不可欠である。つまり間主体性から覚めること、すなわち脱錯覚的な体験が必要とされるのである。したがってオグデンは間主体性とは両者が新たな心理的存在として生まれ直すために、逆説的だが相互拘束的な関係にあえて身を置く試みであり、情緒的に一人であることからくる心の閉塞状況を打ち破ることこそが、間主体性を希求する無意識的な動機であると考えている。投影同一化は上記の間主体性の性質が特徴的に現実化する契機なのだ。さらに主体を取り戻すには、この相互拘束状況を外から見ることができ、かつそれを言葉にして解釈として被援助者に提供できる援助者の側の能力（すなわちコンテインすること）と、その解釈を利用できる被援助者の能力が欠かせないとも述べている。

IV DST を心理臨床に適用する際の問題点

(1) DST と乳幼児関係発達の実際との齟齬

分析の第三主体と間主体性というオグデンの見解は、人が情緒的に他者と交わることで自分を越えた何者かになるというプロセスが生じるという点、しかもそうした自己超越を介してのみ、人には発達や変化が生じるのだという点で、先のトロニックの DSC や DEC モデルと通じるところがあるように思われる。オグデンもトロニックもともに、人が他者と交わり他者との関係に身を置くことで、ある種の自己超越的プロセスが作動すると考えているようである。しかしトロニックはこのプロセスを説明するために前述の DST を理論構成の基盤に置いているのに対し、オグデンは投影同一化という力動的な心理—関係にまたがる概念を基盤に置いている。投影同一化を基盤に置くということは、関係を構成している者の間で心理的内容のやり取

り（投影・取り入れ）が想定されていることを意味する。こうした発想は DST にはあり得ない。あらかじめ前提にされたものは何もなく両者の相互調節の結果生じるのだから。しかし実際の乳幼児観察でも、養育者の側が乳児の純粋な生理的反応にさえ、心理的な意味合いを積極的に付与して関わることは広く知られた事実であるし、それが乳児が心をもった存在へと発達する上で欠かせないとする議論もある（Meins, E. et. al 2003）。それはビオンのモデルにあるような乳児からの投影によって発動する受け身的な親とは対照的で、乳児にある役割を押し付けるあつかましい極めて能動的な親である。親の側が乳児にいわば投影同一化を行っているのである。この乳児のある側面への特異な意味づけが親の表象的側面と深く関わること、またそれゆえ葛藤の世代間伝達やアイデンティティのレッテル貼り（Cramer, B. 1989）などといった、乳児に極めて負荷を負わせる親との関係性が実現してしまうことも臨床実践ではよく知られている。親は乳児との間で情緒の相互調節によって DSC を実現するだろうが、親の SOC はそれ以上のものを常に含んでいる。DSC と SOC とが一致するなどということは乳児同士の関係でもない限りあり得ない。またこのように親の SOC が乳児のそれよりも複雑さや一貫性において格段に優れているからこそ、DSC が成立したとき、乳児の SOC がさらなる複雑さと一貫性を獲得できるとも考えられないだろうか。この点こそ、乳幼児発達と心理臨床の営みの共通点を見出す鍵になると筆者には思える。このように親の側に様々な内容を備えた心があるということ、そして親が乳児と関わる時、この親の SOC の表象的側面が乳児との関係に良かれ悪しかれプラス・アルファを加えることで DSC 自体が多様なものとなること、これらは物理学のモデルである DST とは相容れないのではないだろうか。

これは DST の背景にある生態学的心理学に遡って次のように指摘することもできるだろう。すなわち、心を環境との相互作用のもとに見るといっても、乳児にとっての環境は心をもった親である。そして親もまた乳児という環境を前にして意味（アフォーダンス）を見出そうとしている。相互に意味（アフォーダンス）を見出そうという動きが相互調節に他ならないが、さらに重要なことは乳児と親の心は乳児同士のように対称的ではない。前述したように多様な表象的側面を備えた親の側の意味生成能力の方が乳児がアフォードできるものを凌駕する。その結果生じるのは乳児への意味の過剰な貼り付けである。乳児が付与された意味に再帰的に気づくのはずっと後だが、それまでの間に乳児は特別な意味を背負わされた DSC をそうとは知らずに体験しそれに沿った SOC を形成してしまう。二者一対の意識の拡張には、親の表象的側面が色濃く反映されるのだ。それゆえ、葛藤の世代間伝達等の関係性の障害への早期介入を図る親－乳幼児心理療法は、親子の関係の客観的観察・介入と同時に、親と関わることで親の表象的側面が子どもとの関係に及ぼす影響を評価し、親の表象的側面への介入を同時に行うよう構造化されている。

上述したように、乳幼児と親との発達早期の関係においても、親が表象的側面を心に持つ限り、その関係性とそこから生じる乳幼児の心の形成発達を、両者の相互交流の客観的な直接観察からだけでは捉えるのは不十分である。それに加えて親－乳幼児心理療法に類似した構造で、親の表象的側面の把握を行い、それが現実の相互交流に如何に反映されていくかといった、主観的・表象的側面と客観的・実証的側面とを照らし合わせる研究手法が求められていると考え

られる。青木（2008）は、「被観察乳児」と「臨床乳児」の観点を兼ね備えた「関係論的被観察乳児」という観点を提唱しているが、上記の論考からも十分に首肯できるものである。

（2）DST と心理臨床の営みとの齟齬

上記の論点はそのまま大人の被援助者を前にした臨床場面の関係性にも適用されるだろう。援助者は被援助者への参与観察から、被援助者について多くの意味を引き出してくる（これが臨床の場における援助者の SOC である）。同時に被援助者もまた自分自身（あるいは自分の問題）についての意味を既に持っている（被援助者の SOC）。ここで乳児と養育者との関係と同じく、援助者の引き出してきた意味（SOC）はその複雑さや一貫性において被援助者の意味を凌駕している。それゆえ被援助者は援助者との間に形成された DSC を通して SOC を拡張できると思われる。その際、援助者と被援助者との間に意味をめぐっての交渉（すなわち相互調節）が生じるだろうが、それは援助者が被援助者の心の再帰的・主観的側面について理解を深めることを欠いては進まない。つまり相互調節には、非象徴的な直接的コミュニケーションによる暗黙の关系的な（implicit relational）情動の相互調節と、被援助者の表象的側面と主観的体験に向けて、象徴的なコミュニケーションを介した意味理解という明示的で認知的な（explicit cognitive）な相互調節とがあり、両者は不可分に結びついていると考えられる。そしてこの相互調節は、同時に被援助者にとっては自分自身との取り組み、自分自身との相互調節でもある。そうでなければ、被援助者の SOC は十分な変化を見ないであろう。先に述べた自分自身と向き合うための他者との特有な関係が必要なのは、まさにこの点である。一人では自分自身との対峙というプロセスは発動しないかしても不十分なままに終わりやすい。しかし援助者によって自分をこれまでよりもより複雑で一貫性のある意味付けで扱われたならば、援助者の SOC をいわば梯子にして（scaffolding）、被援助者の SOC もその複雑性と一貫性の次元で拡張されるのである。したがって心理臨床の営みも乳幼児発達と同様に、関係を構成している両者各々の、主観的な体験に関する再帰的な把握について、言いかえれば自分自身との関わりについて考慮に入れない DST では不十分にしか説明することはできないものとする。先述したオグデンの考えは、こうした各々の主観的な体験の相互調節を、無意識的な深みを踏まえてモデル化しようという試みに思える。誤解を招かぬよう付け加えるが、トロニック自身は DEC モデルが臨床過程の全てを説明するとは考えていない。従来からの表象を介在させて説明されている力動的な過程も重要だとしている。本稿はトロニックの DEC モデルは、DST の足かせを取り払うことで、むしろ従来の臨床理論との結びつきを見い出せるのではないかという観点を提出しているのである。

最後にこうした心理臨床の外（対人関係性）と内（対自関係性）の並行プロセスをどのように確かめ評価すればよいのだろうか。ここでも親－乳幼児心理療法がヒントになると思われる。前述したように援助者は親の話を聞くという参与観察の中で親の表象的側面を評価すると同時に、親の子への関わりという顕在的側面を観察し、両者を結び付ける。同様に援助者は被援助者の語りから表象的側面を捉えると同時に、顕在的に生じている二人の関係を参与観察する。援助者が被援助者に向けて発した何らかの意味付与行為（解釈等）によって、被援助者が

援助者に示した反応と同時に、自分自身と如何に向き合ったかを捉え（被援助者が反応して示す言動から）、両者の関連を通して被援助者の心の変化を推し量るのである。これは日々の臨床実践で誰もがやっていることでもある。ただこうした主観的な側面を実証的研究の俎上に載せることは非常に困難に思える。ここで筆者が取り組んでいるのがアナログ研究という方法である。つまり実際の被援助者ではないボランティアとの面接で生じることを直接観察し、かつ両者から面接での体験を聞くなどして、相互交流として生じていることと、各々が自分の中で生じた心の動きとを照らし合わせていくという方法である。これから心理臨床の営みをエビデンスに依拠して解明、説明しようとする動きは増えるだろうが、その際、本稿で見てきたように、如何にして両者の自分自身との関わりという主観的側面を測定の俎上に載せ、それを客観的・実証的な相互交流と連動させて分析するかが、重要なポイントになるものと思う。

文献

- 青木紀久代 2008 親一乳幼児心理療法における精神分析的発達理論と愛着理論 精神分析研究 52, 1, 41-53.
- Buirski, P. & Haglund, P. 2001 *The Intersubjective Approach to Psychotherapy* Paterson Marth Ltd. (丸田俊彦 監訳「問主観的アプローチ臨床入門」岩崎学術出版社)
- Cramer, B., 1989 *Profession Bebe*. (小此木啓吾・福崎裕子訳 1994『ママと赤ちゃんの心理療法』朝日新聞社)
- 石谷真一 2007 「自己と関係性の発達臨床心理学」 培風館
- Lebovici, S., 1988 Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. *Infant Mental Health Journal*, 9.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Clark-Carter, D., dasgupta, M., Fradely, E., & Tuckey, M., 2003 Pathways to understanding mind: Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*, 65. 1228-1238.
- Ogden, T. 1994 *Subjects of Analysis*. Jason Aronson Inc., New York (和田秀樹訳 1996「「あいだ」の空間」新評論)
- Ogden, T. 1997 *Reverie and Interpretation: Sensing Something Human*. Paterson Marsh Ltd and Jason Aronson Inc., London. (大矢泰士訳 2006「もの想いと解釈」岩崎学術出版社)
- Stern, D. 1985 *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books. New York. (小此木啓吾・丸田俊彦監訳 1989「乳児の対人世界」岩崎学術出版社)
- Stern, D. 2004 *The Present Moment*. W. W. Norton & Company. New York/London (奥寺崇監訳 2007「プレゼントモーメント」岩崎学術出版社)
- Stolorow, R., Brandchaft, B. & Atwood, G. 1987 *Psychoanalytic Treatment: An Intersubjective Approach*. The Analytic Press Inc., New Jersey.
- Thelen, E. & Smith, L. B. 1994 *A dynamic systems approach to the development of cognition and action*, Massachusetts: MIT press.
- Tronick, E. 2007 *The Neurobehavioral and Social-Emotional Development of Infants and Children*. W. W. Norton & Company. New York/London
- Winnicott, D., 1965 *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. Tavistock Publications Ltd, London. (牛島定信監訳 1977『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社)

(原稿受理 2008年3月24日)